



7世紀にできたとされる古代の街道「下(しも)ツ(つ)道(みち)」は、藤原京からまっすぐ北にのびて平城京の正門(せいもん)である羅(ら)城門(じょうもん)につきあたる。羅城門をくぐると、幅75mもの朱雀大路がまっすぐ北へのびていた。街路樹として柳の木が植えられていたといい、羅城門から4km先には平城宮の正門である朱雀門がそびえ建つ。

朱雀門の左右には高さ6mの築地(ついで)塀(べい)がめぐり、約1km四方の広さ、130haの広さの宮城をとりかこんでいました。をもつ平城宮を取り囲んでいた。朱雀門の前では新羅(しらぎ)や唐(とう)といった外国使節の送迎、都の男女があつまつて、恋の歌をかけあうのを天皇がみるというイベントもここで行なわれた。元日には儀式があり、天皇が朱雀門まで出向き、新年のお祝いをする事もあった。朱雀門は衛士(えじ)によって守られ、いつもは開いていなかった。平城宮12の門のうち、最も重要な門であった。平城宮の正門としてその雄姿を誇示していた。

朱雀門の位置と規模は、1964年度の発掘調査で初めて確認された。その後も調査が続けられ、1989年度には復原整備を控えて、全面の再発掘が行なわれた。

明らかになった朱雀門は、柱と柱の間の中心間距離がいずれも17尺(約5m)で、正面5間(約25m)、奥行2間(約10m)の規模をもつ。平成10年度に復元建物が竣工した。

『平城宮 朱雀門』独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所 2010年発行」より



0001_全体像



0002_全体像



0003_全体像



0004_全体像



0005_全体像



0006_全体像



0007_全体像



0008_全体像



0009_全体像



0010_全体像



0011_朱雀門から見た大極殿



0012_朱雀門から見た大極殿



0013_部分



0014_部分



0015_部分



0016_部分



0017_部分



0018_部分



0019_部分



0020_部分



0021_部分



0022_部分



0023_部分



0024_部分



0025_部分



0026_部分



0027_部分